

暴力、消去、抵抗の歴史を書く

——キャサリン・C・チョイ著『アジア系のアメリカ史——
再解釈のアメリカ史・3——』（佐原彩子訳、勁草書房、2024年）——

北 田 依 利

コロナ禍以来、感染症が中国湖北省武漢市で最初に報告されたという理由だけで、中国人そしてアジア系 [に見える] 人々への暴力が、世界中で後を絶たない。『アジア系のアメリカ史——再解釈のアメリカ史・3——』は、「暴力、消去、抵抗」をキーワードに、「外国人」憎悪と結びついたアジア系・ヘイトという現在進行形の現象から、米国におけるアジア系の歴史を振り返る。著者のキャサリン・C・チョイは、2020年代に入ってもアジア系アメリカ人が「外国人」として扱われ米国の歴史にほとんど登場せず、多くの人がアジア系アメリカ人の歴史について知らない、ということの問題性を強調する。報道によって浮かび上がったアジア系への暴力は決して新しい現象ではなく、歴史のなかで何度も起こり、消去され、またアジア系の存在自体も何度も消去されてきた。しかしながら、アジア系は暴力や差別による抑圧を受けるだけでなく常に抗議を行い、歴史や記憶の忘却に対しては自分たちの経験を記録することで抗ってきた。さらに「アジア系」と一口にいっても、日系や中国系など東アジアにルーツを持つ人々から南アジアや東南アジアの出身者、ミックスルーツの人々まで、多様な背景を持つ人々がいる。本書は、こうした集団内部の差異と歴史の重層性を全面に押し出しながら、大変斬新な歴史叙述の方法でアジア系アメリカ人の通史を描いている。

どこが斬新なのか。テーマ別に構成された八つの章と幕間・序文・終章は、歴史書としてはとても珍しいことに、時系列の逆、つまり時間をさかのぼる形で構成されている。第1章は、コロナ・パンデミック元年の2020年から、アジア系を病気と結びつけてきた米国の公衆衛生の歴史を、移民排斥と帝国主義の観点を通してたどる。第2章「1975年」は、東南アジア大陸部にルーツを持つ人々の経験を描く。米国によるインドシナへの軍事介入のために、この年、ベトナム・ラオス・カンボジアなどから米国への難民の流入が始まった。第3章は、「アジア系アメリカ人」という包括的な概念が公民権運動など同時代の社会運動と連動しながら1968年に誕生したという起源を梃子に、アジア系とほかのマイノリティ集団、

とくに黒人との関係性・連帯の歴史を示す。第4章は、1965年の移民法改正で米国にやってきた人々に着目する。この移民法は、出身国割り当て制限を撤廃し家族再統合の原則を打ち出すなど革新的であり、アジア系アメリカ人コミュニティが拡大する大きな転換点となったが、移民たちがみた現実米国が標榜する民主主義とはかけ離れたものだった。幕間では同じく1965年を起点に、米国の食を支えるアジア系の労働——農産物の生産や飲食店での給仕など——を検証することで、暴力、消去、抵抗の歴史を探る。第5章の主題「1953年」は、朝鮮戦争で駐在した米軍兵士と現地の韓国人女性の間にも生まれた、ミックスルーツの子ども国際養子縁組が本格化した年である。そこから、アジア系と、白人や黒人・メキシコ系などの間に生まれたミックスルーツの人々の歴史に光を当てる。第6章は、1941年12月の日本海軍による「真珠湾」攻撃と1942年2月に始まった日系アメリカ人強制収容を皮切りに、アジア系の第二次世界大戦の体験と記憶を重層的に描く。第7章は、祖国を植民地化されたアジア系の人々の反帝国主義の運動を明らかにする。コリア系(日本帝国)、フィリピン系(アメリカ帝国)、南アジア系(イギリス帝国)らの独立を求める長い複数の闘争は、ウィルソニアン・モーメントと呼ばれる1919年に転機を迎え、共振した。第8章は、主に中国人女性を売春と結びつけてアジア人排斥を正当化した1875年ペイジ法を起点に、人種差別と性差別が絡み合ったアジア系女性への抑圧と彼女たちの抵抗を示す。2021年3月にジョージア州アトランタ市近郊の複数のスパで銃乱射事件が起き、犠牲者の多くがアジア系女性であったこと・犯人がアジア系女性を性的に客体化していたという事実、著者自身が応答したものである。終章「1869年」では、大陸横断鉄道完成という米国の進歩と近代化の語りから鉄道建設にたずさわったアジア系労働者が消去されてきたこと、そしてコミュニティが消去にどのように抗ってきたのかを分析している。

このように『アジア系のアメリカ史』の章は、一つの年号を起点・起源とし、トピックを掘り下げていく。各章では複数のアジア系集団の物語・場所・時間が鮮やかに編まれ、本全体としては複数の起源・系譜が遡及的に重ねられていく。こうした実験的な歴史叙述の試みを、訳者の佐原彩子はアカデミー章受賞作の映画『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』(2022年)[直訳は「すべての物、すべての場所が一気に」]に喩えながら、「アジア系の語りが必要でも直線的ではなく、混沌としていることを象徴している」と評している(218頁)。原題が *Asian American Histories of The United States* であることから、著者がアジア系アメリカ人の歴史の複数性を示したかったことは明らかであり、ページをめくるとにアジア系の混沌とした系譜をたどるといふ、独特の読書体験ができる。

近年、アジア系アメリカ人研究を代表する歴史家たちが通史の概説書を発表してきたが、そのなかでも『アジア系のアメリカ史』は異彩を放っている。たとえば、Shelley Sang-Hee

Lee は 2013 年に 13 章・365 頁構成で、Erika Lee は 2015 年に 17 章・545 頁で、Madeline Y. Hsu は 2016 年に 5 章・164 頁で、通史を上梓している (Lee, S. 2013; Lee, E. 2015; Hsu 2016)。本書の原著は、2022 年に 8 章・222 頁で出版された。多くが商業出版社（学術に限らず、一般の読者も想定した幅広いジャンルを扱う）の書籍という点では、共通している。16 世紀あるいは 18 世紀中頃といった歴史の始点や、扱うトピック、章の数・ページ数には、それぞれの書き手の史観・戦略や出版シリーズの特徴が反映されており違いがあるものの、キャサリン・チョイ以外の三人は皆、時系列に沿って章を構成している。さらに、地図や写真・風刺画などの視覚資料がしばしば挿入されていることから、いつ・どこで・誰が・何をしたかのような、基礎的な事実を読者が学べるよう意図していることが伺える。それに対しチョイは、視覚資料を入れず、むしろアジア系の歴史がどのように書かれてきたか・忘却されてきたかを提示することで、歴史や文化の語りが作られる力学を読者自身に考えさせるよう迫っている。本書は、読者が日々のニュースを批判的に読み解いたり、レポートや卒業論文など文章を書いたりするための、有用な道標となるだろう。

コンパクトにまとまった概説書の不足を指摘することは簡単であるが、ここでは前述の三者の概説書にもあてはまる、アジア系アメリカ人研究に通底する問題を一点指摘したい。『アジア系のアメリカ史』には、米国本土のアメリカ先住民やハワイやアラスカの先住民がほとんど登場しない。アジア系と黒人やラティネックス（とりわけメキシコ系）との関係性が何度も描かれるのに対し、先住民は不在であるし、まれに登場しても「黒人やラティネックス」と並列されるだけか白人アメリカ人の想像のなかで他者化されている。著者が「暴力、消去、抵抗」をキーワードにアジア系の歴史を語るからこそ、先住民の経験してきた暴力、消去、抵抗への本書の沈黙が、図らずも浮き彫りになってしまっている。パンデミックで先住民コミュニティが被った喪失、「真珠湾」攻撃と日米対立が不可視にするハワイの先住民の植民地状況や、日系アメリカ人の強制収容所と先住民の居住地の近接性、アラスカ先住民の強制収容、鉄道やアグリビジネスが米国による先住民の土地の収奪を強化してきたことなど、本書が取り上げたトピックのなかに、アジア系と先住民の歴史経験の交差点は無数にある。先住民との関係性は、近年のアジア系アメリカ人研究において最も勢いのある分析視角であるだけに、おそらく断腸の思いとはいえ、著者が本書に入れたいという決断をしたことを遺憾に思う。この点は、アジア系アメリカ人史の概説書の今後の課題といえるのかもしれない¹。

『アジア系のアメリカ史』は、個人や家族・コミュニティの物語に重きをおき、現在と過去との絶えざる対話のなかで生み出された書籍である。現代的な事象に対して自身の政治立場を明確にして応答する姿勢は、著者が優れた歴史家であると同時に、エスニック・スタディーズ研究科という人種的マイノリティの社会運動によって設置された、学際的なプログ

ラムで教鞭をとってきたこととも関係があるのかもしれない。本書に散りばめられたいくつもの事例から、著者が素晴らしいジェンダー研究者であることも確認できる。原著は Beacon Press のアメリカ史のシリーズ・ReVisioning Histories の一作であり、『アメリカ黒人女性史』『クィアなアメリカ史』『先住民とアメリカ合衆国の近現代史』などとともに日本語に翻訳されている。さらに、本書と同時期に出版された『アジア系アメリカを知るための53章』と併せて読むことで、アジア系に関する理解が一層深まることが期待される。じじつ、両書の内容は互いにうまく補完し合っている。

アジア系にまつわる暴力、消去、抵抗は、日本に・日本語圏に暮らす我々にとっても喫緊の課題であって来た。関東大震災後の朝鮮・台湾・中国出身者の虐殺と自治体による昨今の記念碑撤去、アイヌの漁業権、沖縄での米軍による性暴力・環境破壊、技能実習生の搾取、ムスリム住民の土葬「論争」、クルド難民への嫌がらせなど、日々枚挙にいとまがない。コロナ禍での中華街の飲食店への嫌がらせや、自治体が朝鮮幼稚園をマスクの支給対象から外したことも、記憶に新しい。第8章のアジア系女性の歴史とアトランタのスパ襲撃事件の接続を読みながら、2000年頃まで日本で多発した、朝鮮学校の女子生徒を狙ったチマ・チョゴリ制服の切り裂き事件を思い出していた。防護策としてチマ・チョゴリ制服は町から消え、暴力の記憶もまたマジョリティの世界からはほぼ消えてしまった。このままでいいはずがない！暴力や差別と歴史の消去に抗う人々を励まし、かれらの声を聞き・ともに闘う糧を、本書は与えてくれる。

参照文献

Day, Iyko, Juliana Hu Pegues, Melissa Phung, Dean Itsuji Saranillio, Danika Medak-Saltzman, 2019, “Settler Colonial Studies, Asian Diasporic Questions,” *Verge: Studies in Global Asias* 5 (1): 1-45.

Hsu, Madeline Y., 2016, *Asian American History: A Very Short Introduction*. Oxford University Press.

Lee, Erika, 2015, *The Making of Asian America: A History*. Simon & Schuster.

Lee, Shelley Sang-Hee, 2013, *A New History of Asian America*. Routledge.

ダンバー＝オルティス, ロクサーヌ著, 森夏樹訳, 2022, 『先住民とアメリカ合衆国の近現代史』青土社.

新田万里江, 2024, 「アジア系とセトラコロニアリズムその系譜と論点」李里花編, 『アジア系アメリカを知るための53章』明石書店, 279-283.

ブロンスキー, マイケル著, 兼子歩, 坂下史子, 高内悠貴, 土屋和代訳, 2023, 『クィアなアメリカ史——再解釈のアメリカ史・2——』勁草書房.

ベリー, ダイナ・レイミー, カリ・ニコール・グロス著, 兼子歩, 坂下史子, 土屋和代訳, 2022, 『ア

メリカ黒人女性史——再解釈のアメリカ史・1——』勁草書房。
李里花編, 2024, 『アジア系アメリカを知るための53章』明石書店。

(Endnotes)

- 1 幸運なことに、アジア系アメリカ人と先住民やセトラコロニアリズム（入植者植民地主義）との関係について、日本語で読むことができる（新田 2024）。この潮流の牽引役の一人・Iyko Day は、アジア系アメリカ人研究が米国の海外への帝国主義的な膨張の検証に偏り、国内での帝国主義的膨張をしばしば見逃してきたこと、黒人との関係性や黒人性嫌悪 (anti-blackness) については掘り下げながらも先住民との関係性は不問に付してきたことを、指摘している (Day et al. 2019: 6-8)。

